

看護学生の自己受容性の実態

高橋永子 尾原喜美子 北村亜希子

高知大学医学部看護学科 783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

The actual status of self-acceptance in nursing students

Eiko TAKAHASHI, Kimiko OHARA, Akiko KITAMURA

Dept. Nursing, Kochi Uni. Kohasu, Oko, Nankoku City, Kochi (783-8505) Japan

要 約

看護学生の自己受容性の実態を明らかにするため、平成20年2月にA県内4年制大学看護学科1年生60名を対象とし、質問紙調査を行い54名より回答が得られた。主な結果は、以下の3点であった。i) 大学入学後、喜び、悲しみ、怒りの体験に影響を与えた事柄は、友人関係であった。ii) 自己受容性の要因間では、「自己理解」が一番高く、次いで「自己承認」、「自己信頼」「自己価値」であった。iii) 自己受容性の要因間の関連をみると、「自己価値」は「自己理解」、「自己信頼」とやや相関がみられた。看護学生1年生は、友人からの影響が多く、対人関係での脆弱さを指摘される中、生活パターンや社会的側面からも学生の特質を分析し、看護専門としてのアイデンティティが確立できる教育指導が今後の課題といえる。

Abstract

To clarify self-acceptance in nursing students, a questionnaire survey was conducted in February 2008, involving 60 first-year nursing students of a four-year college, of whom 54 responded. The principal results were summarized into three points: i) issues that had affected their experiences of pleasure, sorrow, and anger since their entrance were relationships with friends; ii) among the factors of self-acceptance, "self-understanding" showed the highest score, followed by "self-approval", "self-trust", and "self-value" in descending order; and iii) as for the relationships among these factors, "self-value" was moderately correlated with "self-approval" and "self-trust". While freshman nursing students are described regarding their weakness in terms of interpersonal relations, it is a future challenge to analyze their characteristics even from the viewpoints of life patterns and social aspects, to provide educational guidance helping them to establish identities as nursing specialists.

キーワード：看護学生、自己受容性、大学生活

Key words: nursing college students, self-accept ability, college life

緒 言

青年期は、ありのままの自己を受け容れる自己受容が、アイデンティティの確立に重要な役割を果たすといわれる¹⁾。自己受容性が高い学生は、比較的良好な対人関係を構築できるといわれ²⁾、また、大学生の感情体験を分析した速水³⁾は、「喜怒哀楽は、生理的満足を得た時や、目標としていたことが達成された時、仲間と親密な人間関係が形成された時などに生じやすい」と述べている。これらのことから、他者とのコミュニケーション能力に優れた学生は、他者とうまく付き合える自分に満足感を得て自己受容性が高まると考える。

長谷川⁴⁾は、一般の大学生に比べて、看護学生は4年間に看護師・保健師国家試験合格の課題を突きつけられ、ストレスフルな状態と報告している。大森⁵⁾は、臨床実習が学生生活の大きなストレスとなる一方で、親や友人との関わりがストレス解消に影響すると述べており、看護学生の自己受容性と対人態度の関係を調査した結果、自己受容性が高い学生は比較的良好な対人関係を構築できると報告している。

そこで、看護学生の大学生活における感情体験の実態や看護学生の自己受容性の実態について焦点をあてた研究はなく、今回、調査したので報告する。

I. 目 的

図1 看護学生の自己成長に影響を与える要因の概念枠組

看護学生の感情体験、および看護学生は自分自身をどのように捉えているか、自己受容性を明らかにし、学生的良好な対人関係形成教育への示唆を得る。

大学入学後、学生は、友人・家族とのトラブルや支え・経済的問題・アルバイト、講義・実習などを通して、喜び・嬉しさ、怒り・悲しみなどの感情体験する。これらの感情体験をからませ、怒り・悲しみは乗り越え、喜び・嬉しさにより、満足感・達成感が得られ自己を受容し、大学への適応や自己の目標達成へと向かうようになる。(図1)

II. 用語の定義

宮沢ら⁶⁾の文献を参考に下記のように用語を定義した。

自己受容性：自己の諸側面（身体的側面・能力的側面・性格など）をありのままに受け容れることは、「自己理解」「自己承認」「自己価値」「自己信頼」の4側面で構成される。

自己理解：自分自身のあるがままを受け入れようとすることで、自己に冷静な目を向け

自分のことがよくわかっていると自己認識していること

自己承認：現在の自己を嫌わず、自分をそのまま承認すること

自己価値：自己を価値ある存在とみなし、その存在に意味を見出し自己の人間的価値を信じること

自己信頼：現在や将来の自己の可能性を信じ、物事への対処能力に自信を持っていること

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者

同意の得られた A 県内 4 年制大学看護学生 1 年生 60 名

2. 調査内容

- 1) 属性：年齢、家族数と兄弟数、現在の家族構成、友人の数、サークルに所属の有無
- 2) 大学入学後一番楽しかったこと、大学入学後一番悲しかったこと、大学入学後一番怒りを感じたことから 1 項目選択させ、具体的内容に付いては自由記述で回答を求めた。
- 3) 自己受容性に関する内容 27 項目：これらの項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 段階評定で回答を求めた

3. 使用尺度

「自己受容性」尺度

宮沢⁷⁾ が作成した尺度で、作成者の許可を得て使用した。全項目 27 項目よりなり、自己理解（8 項目）、自己信頼（7 項目）、自己承認（6 項目）、自己価値（6 項目）から構成されている。

4. 調査方法

2008 年 2 月に同意の得られた学生に対し、調査票を配布し、無記名による自記式調査法により調査を行い、調査用紙の回収は回収箱を設置して本人の意思により投函してもらった。

5. 調査時期における学生の学習進度

K 大学看護学科のカリキュラムは共通教育科目と専門教育が系統的に修得できるようになっており、科目区分としては、基軸、教養、基礎、専門で構成されている。1 年次のこの時期は、基軸、教養、基礎の科目が主に進行しており、専門科目では、専門基礎としての身体のおしくみ・働き、栄養と代謝などであり、看護専門科目としては、早期臨床体験を含む基礎看護学 I、初めて患者を受け持ち実習する基礎看護学実習 I が終了している。

6. 分析方法

- 1) 自己受容性 27 項目について、「あてはまる」から「あてはまらない」の順に 4 点

から1点まで点数化し、逆転項目には、逆転配点し、得点の高い方が「自己受容性」が高くなるようにした。

2) 自己受容性の各尺度の側面・項目ごとに平均値を求め、要因間で F 検定・t 検定およびピアソンの積率相関係数を算出した。統計処理には統計ソフト SPSS14.0 j for windows を使用し、推測統計値の有意水準は両側 5%未満とした。

IV. 倫理的配慮

1. プライバシー保護のため、個人が特定されないように無記名とし、符号を付け暗号化すること、身元が明らかになる可能性のある情報は削除することを対象者に説明した。
2. 研究に協力しなくても成績には影響がないこと、また調査内容で答えたくない項目は、回答は拒否できることを説明した。
3. 調査用紙の回収は、回収箱を準備し対象者が、自由意思で投函できるようにした。
4. A 大学倫理委員会の承認を得た後、調査を開始した。

V. 結果

1. 対象者の特性

看護学生1年生60名中回収は54名、回収率90%であった。平均年齢19.0歳、性別では、女性46名、男性7名、サークルの参加は46名、参加なし7名であった。家族数は平均5名であった。一人っ子は4名、一人暮らしは、11名であった(表1)。

表1 対象者の属性

		n=54	
項目		人数	%
年齢	18歳	6	11.1%
	19歳	45	83.3%
	20歳	3	5.6%
	合計	54	100%
性別	女性	46	85.2%
	男性	7	13.0%
	無回答	1	1.9%
	合計	54	100%
サークル参加	有	46	85.2%
	無	7	13.0%
	無回答	1	1.9%
	合計	54	100%
家族人数	一人暮らし	11	20.4%
	2~3人	24	44.4%
	4~5人	7	13.0%
	6人以上	10	18.5%
	無回答	2	3.7%
	合計	54	100%

2. 感情体験

大学入学後怒りを感じた体験に強い影響を与えたのは、友人関係 21 人、学業面 7 名、家族との関係 7 人、教員との関係 5 名であった。大学入学後喜びを感じた体験に強い影響を与えた要因は、友人関係 44 人、家族との関係 4 人、サークル 3 名であった。大学入学後悲しみを感じた体験に強い影響を与えた要因は、友人関係 15 人、家族との関係 12 人、サークル 8 名であった (図 2)。

それぞれの体験についての自由記述の内容は、悲しみの体験の具体的な内容は、失恋、病気、田舎過ぎる環境、部活などであった。

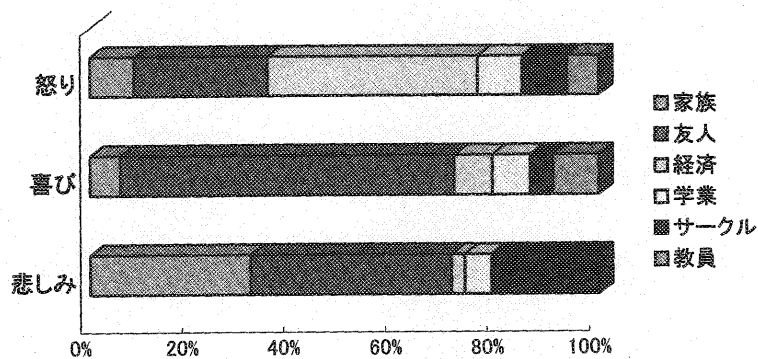


図 2 看護学生の感情体験に影響する要因

3. 看護学生の自己受容性

自己受容性の「自己理解」「自己承認」「自己価値」「自己信頼」の 4 側面の平均値を比較すると、「自己理解」2.78、「自己承認」2.58、「自己価値」2.57、「自己信頼」2.57 で、有意差は認められなかった (図 3)。

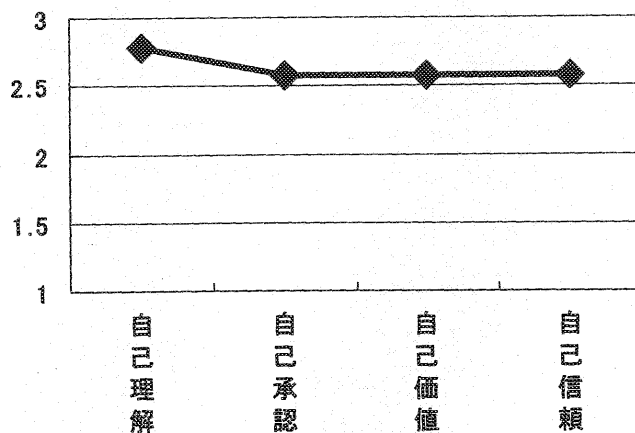


図 3 自己受容性 4 側面の平均値

自己受容性の「自己理解」の側面で平均値の高い項目は、“自分の短所がわかる” 3.50、“自分の容姿の悪い面がわかる” 3.24 であった (図4)。

「自己価値」の側面で平均値の高い項目は“私は生まれてこない方が良かった” 3.5、“私は生きていても仕方ない” 3.43 であった (図5)。

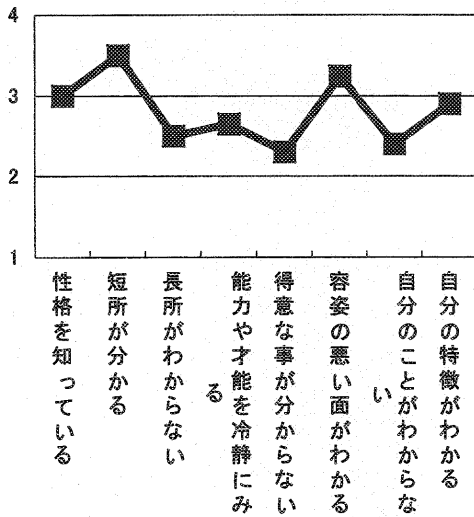


図4 自己理解の項目別平均値

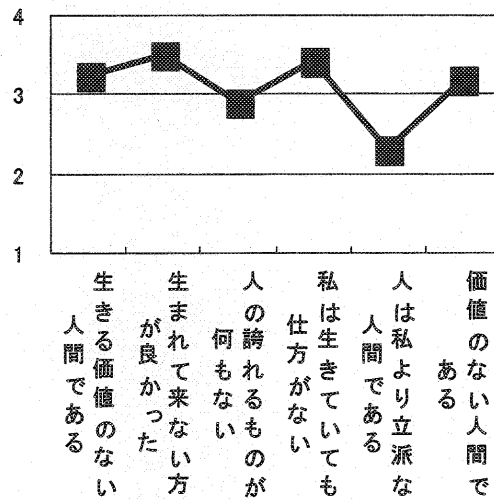


図5 自己価値の項目別平均値

「自己承認」の側面で平均値の高い項目は、“今の自分を大切にしたい” 2.98、“私は自分に合った生活をしている” 2.76 であり、学生は、現在の自分自身を認め、自分を受け入れているといえる (図6)。

「自己信頼」の側面で平均値の高い項目は、“私は自分のことは自分で解決できる” 2.89 と “目標に向かって生活している” 2.81、“困難にぶつかっても克服可能” 2.80 であった (図7)。

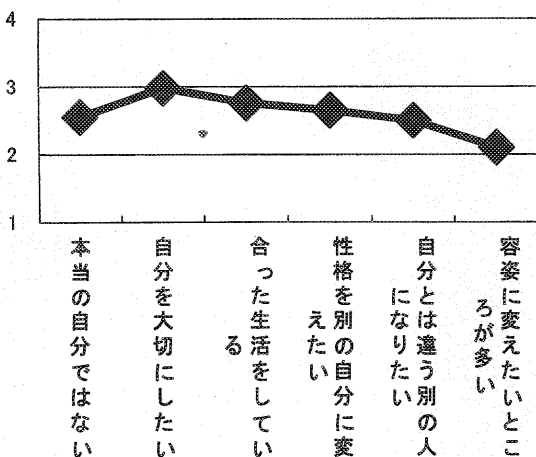


図6 自己承認の項目別平均値

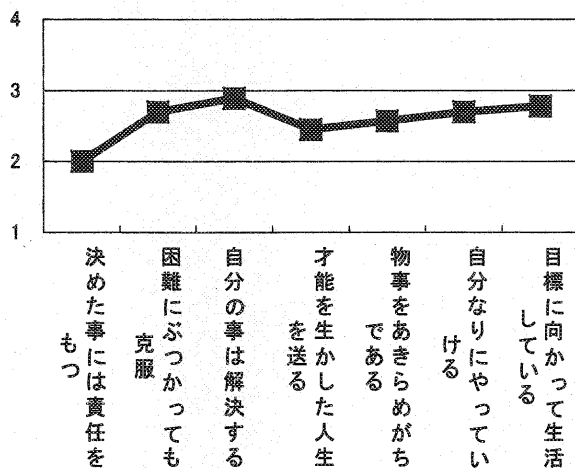


図7 自己信頼の項目別平均値

4. 看護学生の自己受容性に関する要因間の関連

自己受容性の要因間の関連をみると、「自己価値」は「自己理解」 $r=0.380$ 、「自己信頼」 $r=0.492$ とやや相関があり、 $p<0.01$ で有意差がみられた(表2)。

表2 自己受容性 4 因子間の関連

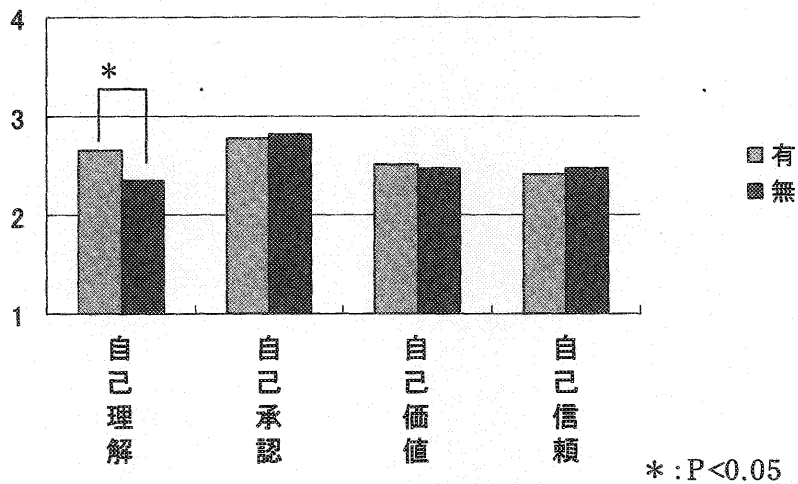
項目	自己理解	自己承認	自己価値	自己信頼
自己理解		-0.043	0.380 **	0.131
自己承認			-0.138	-0.134
自己価値				0.492 **
自己信頼				

5

** : $p<0.01$

5. 自己受容性のサークル参加別

サークル参加別における自己受容性は、「自己理解」の平均値、「有」2.65、「無」2.34、「自己承認」の平均値、「有」2.78、「無」2.81、「自己価値」の平均値、「有」2.51、「無」2.48、「自己信頼」の平均値、「有」2.41、「無」2.47であった。「自己理解」でサークルに参加している者の平均値が高く、有意差が見られた($P<0.05$)(図8)。



* : $P<0.05$

図8 サークル参加の有無別平均値の比較

VI. 考 察

1. 感情体験

看護学生が、大学入学後怒り・喜び・悲しみを感じた体験に大きく影響を与えたのは、いずれも友人関係であり、友人との喜びの体験が一番多く、次いで、悲しみの体験、怒りの体験となっていた。

岩本⁸⁾らによる看護系大学生のライフスタイルにおける学年比較によると、『人間関係』のなかで、「新しい友人をつくる」は1年生が一番多く、また、「相談する・話す」者は、親より友人の方が多く、相談するのは、1年生が一番多くなっていた。

大学入学後、高校時代の友人関係とは別の新しい友人関係を確立していく必要がある。入学後間もない、看護学生にとって、他者との関係性を深めることができ、信頼できる友人を求めることは重要である。

エリクソンは、「人間が自我同一性を確立するためには、まず、集団同一性が獲得されなければならない。集団の中で仲間として他者に認められることで、「自分」という感覚が育っていく」と述べられている⁹⁾。友人関係の中で喜びの体験をすることは、他者に認められる体験につながり、自我の確立に影響すると思われる。

2. 自己受容性

自己受容性の4側面では、「自己理解」が一番高く、「自己承認」、「自己価値」、「自己信頼」の3側面ではほとんど差がなかった。

自己受容とは、自己の身体的側面・能力的側面・性格などをありのままに受け容れることで、その必要性は、末武¹⁰⁾は、「自己変革・自己成長の前提には、自己受容が必要である」と述べており、さらに、マズロー¹¹⁾は「自己実現した人間の特徴のひとつは、自己の矛盾の程度が低いことである」と述べている（ゴープル・F. による）。これらのことから、学生にとって、自己受容性を高めることは、大きな意義を持っている。

自己に冷静な目を向け自分のことがよくわかっていると自己認識し、自分自身のあるがままを受け入れることができることは、アイデンティティの確立を発達課題とする青年期の学生にとって必要なこととなる。また、他者から受容されていると認識できた時に自己受容性は高められると考える。

さらに、「自分の人間性の受容は、他人を人間として受容することに先行するものである。この実感は、自分自身に根ざした理解であり、自分自身の一部になる。そうなることによって、他人に手をさしのべるという看護婦の能力向上に至る」とトラベルビー¹²⁾は述べており、自己受容性を高めることは、看護専門職を目指す学生にとって、重要なことであると考えられる。

今回の調査では、「自己理解」が一番高かった。サークル参加の有無別では、サークルに参加している者は、「自己理解」が高く、有意差が見られた。サークルに参加することは、自分の趣味や特技を生かすことで、先輩や同僚から認められたり、また、サークルの目標達成のために自分自身の欠点も認め、克服することが必要になってくる。“短所がわかる”“容姿の悪い面がわかる”など自己の否定的な部分の理解が高くなっており、自分自身を素直に見つめていることがわかった。

今後、教育において、学生が自己の強みに気づき自己を肯定的に理解できるような教員としてのかかわりが必要と考える。

「自己価値」では、“生まれて来ないほうが良かった”“私は生きていても仕方がない”が高くなっており、この項目は逆転処理をしていることから、自分自身の価値を肯定的に捉え、自己を価値ある存在とみなし、その存在に意味を見出していた。

「自己承認」では、“自分を大切にしたい”が高くなっており、現在の自己を嫌わず、自分をそのまま承認することである。“短所がわかる”“容姿の悪い面がわかる”も含めて、現在のありのままの自分を認め受け入れることができているという結果であると考えられる。

「自己信頼」では、“私は自分のことは自分で解決できる” “目標に向かって生活し

ている”が高く、現在や将来の自己の可能性を信じ、物事への対処能力に自信を持っていることがわかる。

自己受容性の4側面では、「自己価値」と「自己理解」・「自己信頼」で関連が見られた。

自己を価値ある存在とみなしている者は、自分自身を長所も短所も含めて理解し、現在や将来の可能性を信じて物事に対処していることがわかる。

最近、スチューデント・アパシーや就職恐怖など大学生の病理的現象が話題となっている。こうした背景には青年期の学生の精神的未熟さと同時に不安の問題が存在する¹³⁾。今回の調査結果からは、現在や将来への自分の価値を見出している学生は、自分を理解し、自己の可能性を信じ自信を持っていることがわかった。

エリクソン¹⁴⁾は、「青年期はたびたびアイデンティティの危機が訪れる。アイデンティティの危機とは、青年期の場合には、青年が社会から期待された役割を受け入れることができないか、あるいは、その役割を修得できないために生じた緊張状態である」と述べている。

1年生のこの時期は、青年期のアイデンティティ確立の時期であり、その上に看護師という職業的アイデンティティを作り上げていく重要な時期である。入学動機¹⁵⁾が多岐に亘っている現状で、本人の意志によらない進学により、専攻への不適応を起こす割合が保健・看護系で高いという報告¹⁶⁾もある。自己受容性を高めるための教育的なかわりは重要だと考える。

Ⅶ. 結 語

看護学生1年生に影響を与えた事柄は、友人との出来事であった。対人関係での脆弱さも指摘されており、生活パターンや社会的側面からも学生の特質を分析し、看護専門者としてのアイデンティティが確立できる教育指導が示唆された。

教育方法としてグループワーク¹⁷⁾は、人間的な相互交流があり、それがメンバー相互に影響を及ぼしあって人間関係を築いていくことができる。また、学内演習における学びのプロセス¹⁸⁾では、学びの深まりと同時に相手の立場の気づきや協力する大切さが理解でき、課題達成のために感情体験をする中で、人間関係能力を深めていくことができる。

入学時からグループワークや演習などにより、学生相互の理解が深まるような教育方法や自己の長所・強みに気づけるような教育的なかわりが重要だと考える。

引用・参考文献

- 1) 宮沢秀次(1982)、青年期における自己受容性測定スケールの検討、人文科学論集、32；113-139
- 2) 長谷川真美他(2004)、看護学生の悩みと援助規範意識に関する一考察、第35回日本看護学会誌(教育)；157
- 3) 速水敏彦(2004)、大学生の日常的感情に関する研究—感情日誌を用いて—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、心理発達科学；49

- 4) 前掲 3) 113 - 139
- 5) 大森和子他 (2002)、青年期にある看護学生の自己受容性と対人態度の関係性、第 33 回日本看護学会誌 (教育); 191
- 6) 前掲 1) 113 - 139
- 7) 前掲 1) 113 - 139
- 8) 岩本真紀(2002)、看護学生のライフスタイルにおける学年比較 —高校時代から現在にかけての変化から—、第 33 回日本看護学会誌 看護教育; 192-194
- 9) 武井麻子(2004) : グループという方法、医学書院、東京; 17-18
- 10) 末武康弘(1990) : カウンセリング辞典、誠信書房、東京; 225
- 11) Frank G. Goble/小口忠彦訳(1997)、マズローの心理学、産能大学出版部; 44-48
- 12) Joyce Travelbee/長谷川浩訳 (2003)、トラベルビー人間対人間の看護、医学書院、東京; 59-60
- 13) 藤井義久他(2005)、心理測定尺度集Ⅲ、サイエンス社、東京; 199
- 14) 岡堂哲雄(1985)、患者ケアの臨床心理、—人間発達学的アプローチ—、医学書院、東京; 120-122
- 15) 大柴弘子(1985)、現代看護学生の実態と看護技術、信州大学医療技術短期大学紀要、11、2; 15-23
- 16) 石井秀宗(2003)、看護大学生の学習活動と学習意欲に関する研究、Quality Nursing 9、11; 48-62
- 17) 前掲 9) 17-18
- 18) 平瀬節子(2007) : 基礎看護技術の学内演習における学生の学びのプロセス —グループの成長に焦点を当てて—、看護・保健科学研究誌 7、2; 27-34
- 19) 服部祥子(2001) : 生涯人間発達論、医学書院、東京
- 20) 宮沢秀次(1978) : 青年期における自己受容性の一研究、名古屋大学教育学部紀要、教育心理学科第 25 号; 105 - 117
- 21) 若林真理子(2001)、看護学生の自己受容・他者受容と人間関係に関する検討、第 32 回日本看護学会誌、(看護教育); 95-97
- 22) 原田慶子 (2003)、カウセリングの理論や方法を活用した授業の効果—学生の自己受容性の変化から—、第 34 回日本看護学会誌 (看護教育); 213-215